「パートナー」

もも　（20 代）

ある男性と夜ご飯を食べてお互い違う電車に乗るために駅で別れようとした時、このチャンスを逃してはいけないという勢いでプロポーズされた。私はその場でそのプロポーズを受け入れて、そして家族になった。

ある男性、旦那さんは外で私のことを「パートナー」と呼んでいるそう。婚姻届も提出して夫婦になったけれど、私たちはお互いを「一緒に協力して生きていく相手」として捉えている。

というのも、私たちは性的マイノリティ同士。相手に好きという感情を抱いたとしても性的な感情は抱かない。相手に触れることも、「好き」と言うこともどこかぎこちない関係性。確かにこの男性と一緒に人生を過ごしたいと思ってプロポーズを受け入れたけれど、その当時の私は愛というものをよく分かっていなかった。

結婚を決めて一緒に住めば、いわゆる普通の結婚をした夫婦と同様にお互いの価値観の違いに戸惑うこともあった。すれ違いを正す時も相手を大切だと伝える時も、私たちには言葉しか手段がなくそれに苦戦した。

一番苦戦した時のことを覚えている。旦那さんとお金の話をした時、これまでにない表情と声色で堂々と自分の意見を言う旦那さんを目の当たりにした。私が一言えば十返ってくるといった状況。これまで男性と付き合ったことはほぼなく、男性に言葉で詰め寄られた経験もなかった。正直怖かった。そう思ったら、身体がこの人は危険だと察知して話すことも目を合わせることも避けるようになってしまった。

旦那さんも急に私に避けられて困っていると思い、私はこの時のことを正直に旦那さんに伝えた。そして旦那さんは、当時の自身の状況を省みて謝ってくれた。これで解決…だったら良かったものの、その後はお互い言葉を慎重に選ぶようになり、言いたいことを思うように伝えられないもどかしさで心はすれ違い続けていた。

こういう時、言葉では伝えきれない相手への想いや愛を普通ならハグやキスで伝えるのかなと思う。私たちは性的な感情を抱かないためハグやキス、手を繋ぐことさえもなくお互い

の体に触れたことはほぼない。自分が性的マイノリティではなく世の中から見た普通だったらこんなに苦しまなかったのかな…と思わず涙が出た。

そんなある時旦那さんが、「好きだよ」、「愛してるよ」、「かわいいよ」と伝えてくれるようになった。単純だけど温かい言葉が、自分の心を覆っていた氷を溶かした。私たちに必要だったのは難しい言葉ではなく単純な一言。愛の答えがわかっていなかったけれど、「愛している」と言われたらうれしい。きっと私は愛を感じられている。

すれ違いをどうにか正そうと、自分から動いてくれた旦那さん。今では「かわいい」と言いながら私の写真をたくさん撮ってくれる。私は愛を伝えることも自分の本音を伝えることもまだまだ苦手で普通というものと戦い続けているけれど、一歩前を歩いてくれる旦那さんにちゃんとついていきたい。